

万博遺産

橋爪節也

Hasizume Setsuya

第9回

「アヴァンギャルドな「せんい館」

「ルネ・マグリットの男」が、いま中之島に出現



上/大しめ飾りの前に、四谷シモンの《ルネ・マグリットの男》が並ぶ。下右/サイケデリックな展示スペース。写真提供/大阪府 下左/せんい館のパンフレット(表紙を開いた状態)。建物の中央に突き出した赤いドームが印象的。提供/橋爪節也



上/東洋紡本町ビルの今井兼次のフェニックスモザイク(糸車の幻想)。撮影/橋爪節也 下/輸出繊維会館にある堂本印象のタイル壁画。写真提供/PIXTA

EXPO'70で印象的なパビリオンが、「繊維は人間生活を豊かにする」をテーマにした日本繊維館協会の「せんい館」である。

前衛的な美術、映像、音楽が結集し、未完成の美を表現するために、周囲に工所用足場と作業服の人形やカラスを取りつけた建物は横尾忠則がかかわり、高さ二〇メートルのドーム内では、映像作家・松本俊夫の「スペース・プロジェクト」が「アコ」が映写された。ロビーには、四谷シモン制作の山高帽子にフロックコートの人形十数体がレーザー光線で「あやとり」をし、湯浅譲二の音響作品が流されていた。

このパビリオンには面白いエピソードがある。『横尾忠則自伝』(文藝春秋、一九九五年)によれば、横尾は仕事を引き受けたものの、「万博のあの科学技術の粋を結集して偽のお祭りを演出しようとしている名だけの明るい未来にぼくはうんざりしている」として「人のひとりも入らない『せんい館』は死を象徴して、なんと不気味で美しいことだろう。足場の凍結は建築作業の停止を意味し、足場に止まるカラスはもちろん死の使者である」と考えるようになった。

「アンチ万博」的で、とんがったこの案は、当然、出展者に拒絶されるだろうと思いき、横尾は、「せんい館」の最高責任者に面談していく。すると意外にも「どうぞあなたがやりになりたいようにして下さるのが協会としても望むところです」と承諾され、ユニークなパビリオン誕生となったのである。

アーチストの情熱を汲んだ形だが、繊維業界が新しい芸術に理解があったことも背景にあったのだろう。大阪市中央区の輸出繊維会館(村野藤吾設計、一九六〇年竣工)には堂本印象のタイル壁画があるし、東洋紡本町ビルには、長崎の日本二十六聖人記念館でも知られる今井兼次の《フェニックスモザイク「糸車の幻想」》(一九六二年、現・大阪商工信用金庫本店に移設保存)があった。この延長上に斬新なパビリオンが誕生した気がする。

これらのパブリックアートは今も保存されており、当時の「せんい館」の雰囲気を感じたいならば、リニューアルした大阪大学中之島センターのカフェに、四谷シモン《ルネ・マグリットの男》(大阪大学総合芸術博物館所蔵)が展示してある。コーヒー片手に、半世紀前の気分をお楽しみください。

◆橋爪節也(はしづめ・せつや)

大阪大学名誉教授。1958年、大阪府大阪市生まれ。東京藝術大学大学院修了。大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室学芸員、大阪大学総合芸術博物館教授等を経て現在、名誉教授。専門は日本近世・近代美術史で、『橋爪節也の大阪百景』、『大阪イメージ 増殖するマンモス/モダン都市の幻想』(創元社)など著書多数。ドラマの時代考証も手がける。